

▲タリン音楽祭 3万人のうたい手、聴衆は20万人余 (撮影は同行の高橋正志日本のうたごえ事務局長)



# 歌声と花の交歓、人間讃歌の

タリン音楽祭 熊谷 勇二(広島合唱団)

一八九九年から百十年にわたって五年に一度開かれる、出演者三万人、観客は二十万人というタリン音楽祭は北海道合唱団が招待された。過去第一次、第二次訪ソに伴うさまざまな運動の蓄積があったの招待公演である。この音楽祭に広島のうちえ新専従の大野君と共に参加しないかと北海道合唱団木内団長に呼びかけられた。

タリンというのがどこにあるのか、そこでどんなことをするのかとわからないままに、入国手続きだけは整えて、

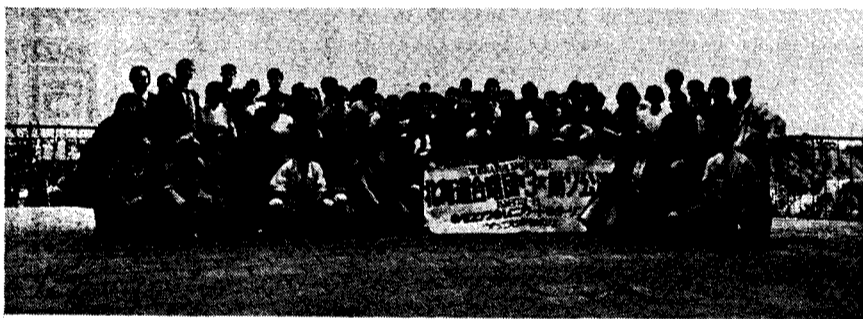
ところが、大野君の訪りが困難となりあれこれという間に私一人となってしまった。この忙しい時期(国労の再建で走り回っていた)に何をしにソ連などに行くのか、と訝(いぶ)かられるのではな

いかに凝縮しながら演奏曲の暗記に努めた。いろいろな準備に悪戦苦闘されている北海道合唱団の人たちには申しわけなく思いながらちやっかりと、厚かましくも一団に加えてもらった次第である。

同日十六時、モスクワのシエルメチエボ空港に到着。入国手続きで持ち物の検査、旅券の顔写真との比較と、いつもながらの不気味さを味わう。ここでひっかかったのが「鬼剣舞」で踊る時使う日本刀(三分)であったらしい。説明に手聞とるので実際に踊ってみせたなど聞いた。その日のうちにモスクワ発の寝台車でレニングラードに向かった。

二十三日、また日本の夕刻のように明るい屋外のホームから長大の寝台列車は汽笛の音もなき走り始めた。レニングラードはトーポリの棉花が雪のように舞い、すべての建造物が、うっすらと茂る街路樹の中に古色蒼然と

# タリン音楽祭紀行



▲タリンの丘で記念撮影、後列右端熊谷さん



▲レニングラード、パブロフスク宮殿前

レニングラードではパブロフスク青年宮殿に行き大公園の中で野外公演を行なった。初めての演奏で特に女性の着物が晴れやかで日本に居たのではあまり感じない日本女性の素着らしさを知った。「鬼剣舞」、「三階のぶちあわせ太鼓」、轟く和太鼓にパブロフスク青年宮殿広場は人の波で一杯となった。その日の夕刻、翌午前中レニングラード市内の有名な箇所をバスで走り、時々降りてソロソロ観光団一行よろしく見学。案内のツーリストの説明を翻訳の四人(サーンヤ、アンドレ、上村、野原)が縦横無尽に日本語で話してくれた。

余談になるが翻訳のサーンヤ、アンドレはナホトカ大学日本語科を卒業しサーンヤは極東大学の先生、アンドレは今春、卒業したばかりの二十

一歳の青年、どちらも美しい眼をした好青年で終始一貫、団員一行と、音楽を共にした。日本から参加した上村未知さんは東京外語大学ロシア語科卒、日ソ貿易東京支店常駐。今回の訪ソすべての面倒をみてくれた露独語境館の才媛スーパリーレイ。もう一人の野原さんは北海道大学のロシア語科卒で上村さんと同じ会社、今回補助で行動を共にした。

この四人のたの語学力と人間性がどれほど大きな役割を果たしたかについては全団員が衆目一致するところである。

七月三日、十四時レニングラードを列車で発ち、二十一日、白夜でまだ太陽の輝くフィンランドの対岸、エストニア共和国タリン駅に到着した。長い屋外ホームを全員、荷物を転がして駅頭に着くと、きらびやかな民族衣装の少年少女約五十名が、輝くような歌声で我々を出迎えてくれた。これは大感激、いよいよタリン大音楽祭の地に着いたのだと自らいきかせてしまった。

今思いついてもどのように表現すればよいのか、とてもペンで書ききれぬものではないタリンの三日間であろう。

## 輝く歌声の outgoing タリン

タリン

## 「うたごえ一千万」とタリン音楽祭

四日の午後、舞踊祭から場所を移し、古い建物が立ち並び旧市役所広場において屋外公演を行なった。きらめくような太陽の光の中、私たちは日本の芸能、平和の歌、闘いの歌、持ってきた演目すべてを、取り囲んだ観衆の前で披露した。

集まった人たちは歌詞は通じなくとも、上村さんの説明にうなづき、理解を共に深めている。この広場の公演は直接人々と接しられる、うたごえ運動の持ち味を最高に発揮できた感銘深いもののように思ったのは私だけではなかったであろう。

全団員と観衆のわかれはバラ、その他美しい花々の交歓でつつき、和服姿の女性団員と共に記念撮影をする人々はあどを断たなかった。

五日、目的の大音楽祭は正午から噂どおり数十万人の観客が半ドーム型の舞台上大写真(三千人以上の子どもの合唱団を迎え、地上三〇〇以上の聖火台に炎があがって大歓声によって始められた。

(11面に続く)

